

第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）会議要録

- 1 日 時 令和6年10月2日（水）18時30分から20時40分まで
- 2 場 所 武蔵野商工会議所4階市民会議室
- 3 出席委員 阿部、市川、熊田、見城、酒井、鈴木、馬場、福本、町田、宮田、山田、吉田（敬称略）
- 4 欠席委員 和、川鍋、坂井、西田（敬称略）
- 5 事務局 福島（常務理事）、田村（事務局長）、ほか事務局職員
- 6 傍聴者 1名
- 7 議 事

（1）事務局より

事務局より、配付資料の確認を行った後、傍聴者について1名出席すること、主管課より武蔵野市地域支援課の福山課長が出席することを伝えた。

【事務局】今回傍聴者が一名出席しております。今回の策定委員会ではグループワークでの討議となりますので、傍聴者がグループワークに同席することを許可いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【全 員】異議なし。

（2）委員長挨拶

【委員長】 本日は出席いただきありがとうございます。いよいよ10月に入りましたが、本日は前回までの委員会にて出た武蔵野市の地域課題等をどのように解決していくのかを話し合う、特に大事な討議の場であると考えております。そのため、各委員には様々な解決に向けたアイデアを出して欲しいと思います。また、本日出したアイデアを基に第5次武蔵野市民地域福祉活動計画（以下「第5次活動計画」）の骨子の第一案を作成することとなります。

（3）議 事

①第3回策定委員会 会議要録確認 資料1

【委員長】 資料1 第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第3回）会議要録を確認し、意見や訂正等があれば修正いたしますが、いかがでしょうか。  
なお、委員会終了後の校正依頼については、10月9日（水）までに事務局までご連絡ください。

※委員からの意見等はなかった。

②今後のスケジュール確認<sup>裏面</sup>

【委員長】 今後のスケジュールについて、事務局より報告をお願いします。

※次第の<sup>裏面</sup>に基づき事務局より報告した。

【委員長】 事務局より説明がありましたが、何か質問がある委員はいますか。

【委員】 12月に実施予定のパブリックコメントについて、具体的な実施期間は決まっているのでしょうか。

【事務局】 12月4日の第6回策定委員会におきまして、第5次活動計画策定の最終的な中間まとめ報告に関する協議を予定しており、各委員からの意見を踏まえ、修正等を行った上でパブリックコメントの実施を予定しております。そのため、現時点で具体的な実施日は確定しておりませんが、12月中旬から年末が実施期間となることを想定しております。

【委員】 年末までの実施期間とする場合、世間的に気忙しい時期となるのではないかとということと、パブリックコメント等への対応が1月8日を予定していることを考えると、よりパブリックコメントがもらえるような工夫ができると良いと考えています。

【事務局】 パブリックコメントの実施方法等について改めて検討し、今後の策定委員会において提案いたします。

【委員長】 パブリックコメントの期間が年末までとしておりますが、やはり多くの方から意見をいただくことが大切かと思えます。様々なツールを活用しながら多くの方に意見がもらえる方法について検討をお願いします。

③グループディスカッション「課題の解決の仕方を考える」<sup>資料2</sup>

【委員長】 グループディスカッションの実施方法について、事務局より説明をお願いします。

※<sup>資料2</sup>に基づき事務局より説明した。

【委員長】 各グループにてグループディスカッションをお願いします。

(グループワークを実施した後、各グループで出た意見について発表があった。詳細は<sup>別紙 第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）グループワーク報告</sup>を参照。)

【委員長】 各グループからの発表がありました。非常に有意義な話し合いが出来たのではないかと思います。今までの委員会では出ていなかったキーワードとして、「楽しい」という言葉がありました。そういったキーワード等を大切にしながら

ら計画の策定が出来ればと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

(4) その他

事務局より、グループワークにて使用した第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第3回）グループワーク報告について、一部校正内容に不備があったことを一部の策定委員から指摘があったため、当該資料をその場で回収することを説明した。

※当該資料を各委員等から回収した。

(5) 次回日程

・11月6日（水）18時30分より 武蔵野商工会議所 4階 市民会議室

**【委員長】** 他になければ、これで第4回の策定委員会を終わります。

第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）  
グループワーク報告

グループA 情報発信			
阿部 春彦	宮田 恵	吉田 真也	
(職員) 横山、中村			
<p>【情報発信の仕組みづくり】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市民用のアプリを作って、興味に応じて様々な情報が届くというシステムはいいなと思った。</li> <li>・視覚・聴覚障害者は情報弱者になってしまう。また、読んでも理解できない人もいる。情報弱者が情報を得られるよう、やさしい日本語等、対象者に合わせた取り組みが必要。</li> <li>・マンパワーなど、カタカナが多すぎてわからないうえ、テレビのスピードは速い。</li> <li>・今困っていない人は、基本的に読もうとしないと思うので、誰に届けるかが大事。困った時にすぐに見ることができる状態が良い。</li> <li>・困っている人にしっかり情報が届くようにしなければならない。色々な方法があると思うが、市報等すべての人に届く媒体の他にも、人や団体に拠った情報もあると思う。</li> <li>・口コミも大事。知らない人から聞くよりも、地域の集まり等で知り合いから聞く方が良いと思う。それぞれが伝えられるところで情報を広げていく、情報の連携が大切。そういった意味でも地域のつながりは重要だと思う。</li> <li>・市民社協による地域団体の運営支援においては、助成金の授受だけの関わりになってしまっている団体もあるので、もっと職員にも参加してもらい、広報等でも協力してもらえると嬉しい。市内には多くの施設があるため、アウトリーチにもっと力を入れてほしい。職員経由で広がる情報もある。</li> <li>・若い人がボランティアに関わるきっかけは、学内のサークルが多いと思う。また、大学に市民社協職員が来ることで広がる情報もあると感じた。</li> <li>・市民社協の職員のアウトリーチ機能は体制強化をした方が良い。</li> <li>・誰と出会って情報をもらうかがとても大事。すでにつながっている団体から得る情報は多いと思う。活動に参加することで多くの人に伝わっていくのだと思う。</li> <li>・情報弱者にどのように情報を届けるか、どうして届かないかを考えたい。情報を載せるだけになってしまっている。</li> <li>・映像はどうか。例えば市報の大切な部分は映像化したり、必要な情報だけピックアップされるような仕組み等はどうか。</li> <li>・個人的には、「3秒で分かる」等のまとめサイトや、必要な情報をピックアップしてくれるコンシェルジュのような取り組みがあれば良いと思う。働いてい</li> </ul>			

第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）  
グループワーク報告

る世代は特に助かると思う。情報が多すぎて分からない人向けに、ある程度キュレーションされた情報を得られると良い。

- ・美容院等も、色々な情報を持ってほしい。色々な業種と連携した方が良い。
- ・「〇〇さんだから話そう」となるように、人によって情報が選ばれているので、口コミも大事。

【活動団体の情報発信について】

- ・情報が垂れ流しになってしまっているように感じる。自分事として捉えづらい。どれが自分にとって必要か分かりづらい。
- ・塾のダイレクトメールのように、ピンポイントで必要な情報を必要な人に届けたい。必要だと感じれば読むと思う。就職活動関係のダイレクトメールや市の督促状等は自分に関係があると感じた人が見る。
- ・武蔵野市の団体のことも、「知りたい」と感じないと分からない。
- ・自分ごとと捉えられるような広報が必要。他人事だと思っている人に「あなたのことですよ」と思わせることは難しい。
- ・ピンポイントで情報が来るとわかりやすい。SNSなどのサジェスト機能はすごいと思う。
- ・自分の興味のある内容など、欲しい情報をすぐ見られると良い。団体のチラシもそれぞれが漠然と配布しているように思える。
- ・今困っていない人に情報を届けたいと考えた時に、ターゲットはどこになるか。地元の地縁活動にあまり関心が持てない。平日の昼間にわざわざ休暇を取ってまでやりたいことは、自分の興味があることで楽しいことだと思う。
- ・楽しいことであれば参加するが、会議等となると興味が湧かなくなる。
- ・大学生が活動に参加するきっかけは、「何か自分にプラスになることかどうか」だと思う。例えば、就職活動を控えている学生であれば、「コミュニケーション能力が伸ばせる」等、スキルアップにつながるのであれば参加しようと思う学生は多い。
- ・「スマホの操作のサポート」だけでは参加しない。「イベントに参加することによって何が伸びるか」「その先は何か」「何がメリットか」まで広報に載せるだけで効果が変わると思う。
- ・参加するメリットを記載した方が良い。また、団体側もそのメリットを自覚する必要がある。また、体験談や、「見学だけでも大丈夫」等の文言も必要だと思う。一回参加すると抜けづらい。
- ・参加のハードルを下げる必要がある。また、1人よりも複数の方が参加しやすい。
- ・情報の届け方として、気になる人にはポスティングをし続けることも時には必要だと思う。自分は、紙面は強制的に受け取らざるをえないため中身を確認す

るが、メールの一斉送信はあまり読まない。情報の受け取り方は人それぞれだ  
と思うので、様々な方法を平行させる必要がある。

- ・どの発信方法が適しているかは人それぞれなので、紙や電子、口コミ等様々な方法で進めていくのが良い。
- ・情報を発信する側も、色々な手段を使う意識を高める必要がある。
- ・内容をよく知らない人が読むという前提でチラシを作成する必要がある。
- ・昨今活動が目立つと叩かれるような風潮があるが、長い目で見ればそれも福祉教育だと思う。繰り返し情報を発信し、正しい理解をしてもらうしかない。反応があるということは知ってもらっているということだと思う。良くも悪くも知ってもらえることが大事。

#### 【地域団体の活動について】

- ・「福祉的な活動」というよりも、様々な分野の団体が活動し、その中に福祉的な情報以外の情報も流せると良い。
- ・無知の状態で急に困るのが親の介護や若年性認知症のことだと思う。働いているとそのような情報は全然分からない。イベント等で、近い将来困るかもしれないテーマを扱うのも良いと思う。
- ・福祉の分野でも、楽しいものがあると良い。
- ・30～40代へのアプローチ方法は、福祉的な活動ではないことも選択肢としてあると思う。近隣住民の30～40代が「本を読もう」「お酒を飲もう」等と集まる「〇〇部」という取り組みのおかげで、住民同士の日頃のつながりができ、豪雪の際に迅速に支援ができたという事例がある。この事例では、災害支援を進めるためにつながりづくりをしていたわけではないという点がポイントだと思う。
- ・30～40代が住民同士でつながるためには、趣味や飲み会等よりライトなものが良い。おやじの会は、イベントの手伝い+飲み会が多い。
- ・「親の部活動」という取り組みはどうか。集まりがあることによって、情報の広がり等副次的な効果もたくさん生まれる。楽しみながらの活動が良い。

#### 【福祉教育について】

- ・福祉や社協についてより多くの人に知ってもらいたい。
- ・介護については、小中学校で取り扱えると良い。子どもを対象にすることで、その保護者にも広がる。
- ・30～40代を動かすのはまず子どもだと思う。子どものためのイベントであれば、親も参加する。
- ・現代の子どもは、学校教育の中で福祉教育が位置付けられているが、保護者世代の方が学ぶ機会が無かったのではないか。学校公開で福祉教育を取り扱うのは良い取り組みだと思う。

第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）  
グループワーク報告

- ・福祉教育は、学校教育や指導方針の中にしっかりと位置づけてほしい。
- ・武蔵野市においても、市民科の授業として福祉に関する授業を入れてほしい。
- ・青少協の活動には私立学校に通う子どもも参加しているが、改めてその層へどのように情報を届けるか、アプローチ方法を考える必要がある。
- ・子ども向けイベントのテーマとして、「スポーツ」「文化」は人気がある。「福祉」も子どもを対象とできるようなイベントをもっと打ち出してみてもいいのではないか。例えば車いす体験や、イベントに参加することで自由研究が完成するようなものはどうか。
- ・レモンキャブについて小学生に説明した時に、保護者が非常に感銘を受けていた。子ども向けのものでも、想像以上に保護者に反響がある。そのためにも、門戸を広げておく必要がある。
- ・自身が所属する団体でも、「視覚障害者について調べたい」という子どもの相談を受けたことがある。子どもの自由研究という切り口は良いかもしれない。そういった意味では、盲導犬も人気だと思う。
- ・助成金交付団体に、子どもの自由研究に役に立つイベントの協力を仰ぐのはどうか。団体の広報にもなると思う。
- ・未就学児の子どもとその親を巻き込むような取り組みが必要。
- ・子どもが体験したイベントを家で話す時に、保護者にも広がる。
- ・「楽しい」「知りたい」という気持ちが大切。いきなり「講演会があります！」というよりも、例えばレモンキャブの試乗等、ライトな体験会の方が参加者が増えると思う。
- ・子どもを巻き込んだ方が良い。子どものためなら、どれだけ忙しくても親は動くと思う。

グループB 住民のかかわり・つながり

市川 順子	鈴木 庸子	馬場 武寛	
-------	-------	-------	--

（職員）佐々木、河合

【外国人の子育てについて（課題に対する周囲の理解）】

- ・外国人が子どもを育てる際、現地の言葉もしくは母語のどちらを使うと良いか考えた場合、一般的には母語で育てることが良いとされている。
- ・以前に社協から助成金の交付を受け、「多言語環境での子育ての「ことば」ワークショップ」を開催した。
- ・地域とのつながりの中で、外国人の親子も気軽に参加できるような仕組みがあると良い。

【人・地域のかかわりについて】

- ・人によって個人差はあると思うが、地域とつながるきっかけが作られるような

仕組みづくりや情報発信ができると良い。

- ・昨今の災害の多さを考えると市民全体にかかわりがあるテーマは「防災」であり、働いている人も子育て世代も巻き込むことができる。しかし関心があっても防災では人は集まらない。逆に他のテーマ（例えば子育て）だと、自分ごととして考えにくいので多様な人はかかわらない。
- ・子育て世帯や働く世帯がプライベートな時間を使って、防災の話をわざわざ聞きに行くことは珍しい。
- ・大きく総合防災訓練をPRしても、はらっぱ防災フェスタのようにイベントに楽しさを盛り込んだ仕掛けにしないと人は集まらない。
- ・多世代交流とは言うが、若い世代は必ずしも高齢者と関わりたいとは思っていないのではないか。
- ・コロナ禍の後、市内のイベントが徐々に再開していると思うが、コロナ前とコロナ後は人の意識や行動に大きな変化があり、従来のイベントが誰を対象にどんな効果があるのかなど、根本的に見直す等、検証が必要では。  
⇒6月に環境やフェアトレードのイベントを開催した際には、近隣の高校生や大学生が積極的にボランティアに参加してくれた。継続するイベントがあれば、時代の変化とともに参加する人や意識も変わってくるのでは。  
⇒地域によってはイベントの年間スケジュールを調整しており、お祭り等のイベントを「見える化」することで、他の地域のイベントと日程が被らないように工夫している。  
⇒検証をする中で、市内で「この時期はこの場所にばかりイベントが集中する。この場所や時期にはイベントが少ない」等が分かり、年間を通していろんな場所で効果的にイベントを回すことができるのでは。
- ・若い人がイベントに参加するには面白さが必要。  
⇒サロンを開き、例えばポケモンカードと将棋を同じスペースで行うことで、異なる趣味を持つ人が話し合える場所を作ることができるのでは。  
⇒以前地域のイベントでeスポーツを高齢者と子どもが行っているイベントがあった。
- ・武蔵野市は吹奏楽が小学生から盛んで、大人世代も音楽をやっている人が多い。
- ・阿佐ヶ谷のジャズイベントや、中野の盆踊りのように、地元の人が共有（参加）できるような音楽イベントが町中であると良いのでは。  
⇒地域単位でそのような活動があるとなお良い。

【顔がつながる場をつくる】

- ・防災×面白さ（ゲーム、音楽、BGMがあるサロン等）はどうか。
- ・ベンチが歩道に点々と置いてあると、そこで休憩もできるし、座って気軽に話



第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）  
グループワーク報告

すこともできるのでは。  
 ⇒む～バスのバス停などにベンチがあると良いのでは。  
 ⇒吉祥寺通りの前のバス停はベンチがある。

- ・武蔵野市は美容院や床屋が多いので、その場所を借りてサロンにするのはどうか。
- ・吉祥寺南町は喫茶店が無い。
- ・環境にもよるが、海外の人は気候が暑くても寒くてもテラスにいる文化がある。日本ではテラスが置けるような道が舗装されていないことも課題では。
- ・ファミリーマートはイートイン席を近々廃止する。
- ・最近のコンビニはトイレが使えない。  
 ⇒コロナ禍以降トイレを貸し出すコンビニが少なくなったことやトイレを利用する人のマナーの問題も影響していると思う。
- ・孤立している人のつながりを作りたい。
- ・子育てのスタートアップ、不老体操や高齢者総合センターでの趣味探し等があるが、コミセンで気軽に参加したい活動を調べられるようになるとなお良い。
- ・家族がフィットネスジムに通っていた。  
 ⇒居場所として使わせてもらうのはどうか。  
 ⇒民間に全て頼るだけにはしたくない。
- ・サウナや銭湯等、地域の憩いの場がもっとあると良い。武蔵野市はそのような場所が少ない。
- ・コミセンではフリーマーケットを行っているが、市報では出さずに地域のチラシのみで広報している。  
 ⇒SDGs やエコ活動の観点で地域の SNS で広く周知するのはどうか。  
 ⇒様々な地域でフリーマーケットを開催していれば、「この場所だったら行ける」という場所が出てくるのでは。  
 ⇒二葉専門学校に協力してもらうのはどうか。  
 ⇒公会堂を立て直した後のスペースを使い、フリーマーケットを行うことも可能では。
- ・近隣の高齢者の中で外出するとトイレに行けないから外出したくないという人がいる。そのため、身体が弱る。

グループC 担い手			
熊田 博喜	見城 学	町田 敏	
(職員) 木原、後藤			
【一緒に活動する仲間を探す】			
(1) オールマイティな即戦力より、1つでもできる人を2～3人を増やす			

- ・コロナ禍でテレワークになったことがきっかけで、コミセンの花壇の手入れに参加してくれた若い男性に草刈りも頼めないか聞いたら「花壇は楽しみだが、草刈りは使役」だと断られた。自分たちが楽しいと思った活動に参加してくれている。
  - ・地域活動の有償化についても意見があるが、どこまで仕事として位置付けてよいのか。そのためには、「①過多にならないよう整理する」「②必要なことに注力できる」がないと難しい。また有償とするなら、「気持ちの補填程度」が適当なのではないか。
  - ・今現在様々な活動に出ているオールマイティな人もかつてはそうでなかったはず。いきなりオールマイティな人を探すのではなく、入口を軽くしたい。
  - ・「1つでもできる人」をどうコーディネートするかが大事。コーディネートする役割が必要。
  - ・できるだけ多くの人に関わってもらえば、残る人もいる。
- (2) 固定概念の脱却
- ・オールマイティな人もそうだが、担い手は「こうあるべき」という考えは変えなければならない。
  - ・今やっている人が後継者を探すという考え方はもう難しい。
  - ・地域活動において、一番の負担は「事務局機能（取りまとめ・記録・会計など）」ではないか。専従者が必要だが、誰かが担ってくれると丸投げになる恐れもある。
- (3) 後継者・担い手不足は共通の課題
- ・後継者や担い手不足は、商工会だけでなく、地域全体の問題だと思う。
- (4) 楽しさやメリットなど人の欲求を原動力としてPRする
- ・趣味などパーソナルなつながりから地域活動に参加するきっかけをつくる。また、地域活動から派生して趣味活動につながるようにするなど、循環するしくみをつくると人材が増えるのではないか。
  - ・福祉や公共性の高い活動は真面目なイメージがある。
  - ・地域活動は本来ボランティアベースなのだから、やりたくないことをする必要はない。相手の興味をどう広げていくかも考えていく必要がある。
- (5) 様々な価値観・ライフスタイルを認める
- ・今まで平日日中は仕事で地域にいない大人が多かったが、平日に大人がいる社会もある。専業主婦・主夫層や定年後の人ばかりに焦点を当てるのではなく、隙間時間での参加も考えたい。
  - ・コミセンの窓口業務で、子どもが学校に行っている午前中はできるという方に入ってもらった。休日や夜間、学校の長期休暇などは参加できないが、それを踏まえて参加できる体制をとっている。

- ・参加する人は何かしら関心のある人でもあるので、自分から関心を広げてくれると思う。
- ・今までは子どもを仲立ちにした PTA や専業主婦などのコミュニティから派生した活動が地域とかかわるきっかけの中心だった。しかし、最近は子どもがいない世帯や共働き世帯、SNS 上のつながりなど市民の生活が変化しているので、視点を変えないと地域活動との接点がなくなっている。
- ・「個別化」や「多様性」は大切であるが、対応を変えなければいけないなど求められることが担い手側の負担になっている。これをボランティアベースの熱量だけで支えられるのか。

#### 【活動、活動者の評価】

##### （1）活動している人を褒めたい！～ポジティブフィードバック～

- ・活動している人たちをもっと褒めたい。
- ・自分たちの活動を誇りに思うきっかけは、他者から褒められること。
- ・活動の整理の視点としても、「褒められること（続けること）」「褒められないこと（見直すこと）」で、市民から見た活動の価値や役割を考える。
- ・ボランティアベースの活動のモチベーションの一つに他者からの感謝があるが、引き継がれていくなかで、善意だけ回収されてきちんと褒められていない（評価されていない）活動がある。

##### （2）活動の披露がモチベーションになる（露出する機会をつくる）

- ・学校で吹奏楽部を見て、「子どもたちの定期演奏会の前座で演奏する」ことを目標におやしバンドを組んだことがある。今では、卒業した子どもや女性にまで伝播し、地域内にたくさんのバンドができた。楽しいことは子どもから親へ、また親から子どもへと広がっていくと思う。
- ・PTA の活動をインスタ動画で紹介している人がいる。

#### 【全市的に活動を整理する】

##### （1）団体の必要性を市民に問う

- ・コミセンができて 50 年、地域社協ができて 30 年ほど経過して、一つの歴史となっている。このような活動をどう伝えていくか考えていく一方で、長年続いているものをどう変えるかも考える必要がある。
- ・市民アンケートをすることで、マイナスな意見が出る怖さもあるが、これまで武蔵野市の市民自治について、市民に必要性を問うたことは一度もないと思うので、率直な意見を聞きたい。

##### （2）団体の役割を再構築する

- ・参加団体の目的意識や地域のなかでの位置づけを他者に伝えられるほど意識して参加している人はあまりいないのではないか。
- ・結成当初は、誇りをもって行っていた活動も、引き継いでいくにつれ、「義務

第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）  
グループワーク報告

<p>感」となり、「犠牲」になっていく。目的や使命まで共有されていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域社協もコミセンも良いことをやっているのに魅せ方が控えめで目立たない。</li> <li>・子どもたちが活動者世代になったときに参加できるような素地をつくれるか。</li> <li>・一生懸命活動していても、活動の意味を他者に理解されないことで胸を張れない。（例：コミュニティ協議会の運営委員は無償で活動しているのに「市の職員でしょ？」と言われる）</li> <li>・現状維持を続けるのはジリ貧だと思う。</li> <li>・PTA からつながって活動に参加したが、参加して団体の必要性が分かった。</li> <li>・他市ではやっていない取り組み（地域社協、コミセンなど）をどう育てるか、伝えるか、変えるかが整理の第一歩だと思う。変えるべき点、変えてほしくない点は活動している人ではないとわからないことがある。</li> <li>・災害時要援護者対策事業は惰性になってしまっている点もある。いい加減にしてほしい。惰性になってしまっているものをどう見直すか。</li> <li>・地域によって、団体同士をつなぐハブ機能を果たしている団体が地域社協だったり、コミセンだったり、自主防災組織だったりとハブ機能を持つ団体が異なる。</li> </ul> <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他市から自治会・町内会がないなかでの住民自治について視察があるくらい武蔵野市は実績があるのだから、バージョンアップもできるはず。</li> </ul>			
<b>グループD 相談機能</b>			
酒井 陽子	福本 千晴	山田 剛	
（職員）三藤、林			
<p>【困ったときに助け合えるしくみについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが保育園や幼稚園の頃は、以前は立ち話で身近な情報交換を行う事が多かったが、現在はLINE やグループLINE などでのやりとりが多くなっている。</li> <li>・様々な SNS での情報収集があるが、インスタ派とLINE 派があるようだ。</li> <li>・武蔵野市関前の地域密着情報を掲載しているポータルサイト「みんなの関前」のように学校のイベントから忘れ物までローカルな情報が入ってくるので、安心感がある。そこに地域社協の情報が入ってくると良いのでは。</li> <li>・平時から関係性を構築しておくことが重要。そうでないと災害時など緊急時に活かせない。</li> <li>・お節介してくれる人をどう増やすか。</li> </ul> <p>→ケアグループはそのような機能を持っていたのではないか。同様の機能を復活させてみてはどうか。ホームヘルパーなどと比べてハードルが低くて良</p>			

い。

→ケアグループは市民社協の事業として展開していた。基本活動（個別ケースの支援）と自立活動（サロン活動など）があった。地域社協の活動の背景には、この自立活動が影響している。

- ・地域社協以外の人でも誰でも参加できる研修（勉強会・事例検討など）がシステム化できていると良い。

#### 【サービスへのつなぎ】

- ・福祉に関する相談が複雑化・多様化している。武蔵野市の職員も専門性の向上のため、第六期長期計画・調整計画にも明記されているが資格保有を要件とする福祉専門職の採用について検討が進められている。また、社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士の有資格者30名程度で構成される「武蔵野市役所福祉士会」を本年設置し、それぞれの担当部署での事例を持ちよって、ケース検討会を開始したところである。
- ・全国的に地縁団体の活動が衰退していく中で、それ以外の活動をそのようにすすめていくかが大事。
- ・地域情報を書いてあるチラシ等が常に同じ場所に置いてあるようにして、必要な時に取っていけるような場所（三鷹駅のラックなど）があるといいのではないか。

#### 【相談機能（相談を受ける場・担い手・しくみ）】

##### （相談を受ける場）

- ・気軽に集える場が良い。若い世代は中々来ないかもしれない。
- ・かなり前のことだが、「西久保2丁目安心助け合いネットワーク」のチラシがポスティングで入っていたことがあった。
- ・地域懇談会では、個人情報の取り扱いについても話がでていた。前回の策定委員会では「相談を受ける人は近所のおじさんおばさんでいい」との意見があったが、個人情報を適切に扱えるのが課題。それもあり、相談者も気軽に話せないのではないか。
- ・よほどその人に問題意識がないと相談に来ることは難しい。
- ・相談を受ける場所はいくつもあるがどこに行けば良いのかがわからない。
  - 相談を受けられる場所を地図におとしてはどうか（マップ化）。
  - 相談機能のオープンハウス
  - お祭りなどの楽しいイベント（地域社協まつり又はフェスティバル）に相談窓口を設け、ついでに相談にのってもらえるような雰囲気の方が立ち寄りやすいのではないか。

##### （担い手）

- ・子どもを預けるサービスなどが充実していない時代は、子どもの成長をすべて

第5次武蔵野市民地域福祉活動計画策定委員会（第4回）  
グループワーク報告

親がみていた(みないといけない)が、現在は共働きが当たり前になり、子どもの成長を常にみれない状況になっている。その価値観の違いをどのように上の世代に理解してもらえるか。

- ・(地域社協について)イベントをこなすことでいっぱい。本来はあるべき姿は、日頃の付き合いの中で信頼関係を構築し、相談できることが一番。いきいきサロンやテンミリオンハウスなどが理想的。老人クラブとうまく連携できないか。

(しくみ)

- ・東部の地域懇談会で意見が出ていたが、単身世帯でかつ身寄りがない人に対して何かあった際にどのように支援できるか。
- ・地域社協の役割が重要。わかりやすくするために「～福祉の会」に名称を統一してはどうか。ケアグループでも良い。
- ・地域社協のメンバーは、いくつもの顔を持っている人が多い。地域社協がもっと機能すれば良い。→課題は高齢化か